
読売テレビ『かんさい情報ネット ten.』
「迷ってナンボ！大阪・夜の十三」に関する意見

放送倫理検証委員会

委員長	神田 安積
委員長代行	鈴木 嘉一
委員長代行	升味佐江子
委員	岸本 葉子
委員	高田 昌幸
委員	長嶋 甲兵
委員	中野 剛
委員	西土彰一郎
委員	藤田 真文
委員	巻 美矢紀

目次

I	はじめに	1
II	審議の対象とした番組	2
III	委員会の検証	2
1	報道局制作のニュース・情報番組『かんさい情報ネット ten.』	3
2	『ten.』の制作体制～2つのテイスト・2つの手法	3
3	第2部の企画コーナー「迷ってナンボ！」	4
4	「迷ってナンボ！大阪・夜の十三」の企画から放送まで	4
	(1) 企画・ロケ～撮影3時間の短期決戦	4
	(2) 編集～分業とチェック体制	6
	(3) 放送～凍りついたスタジオと司令塔の不在	7
5	放送後の迅速な対応と検証・再発防止策の徹底	9
IV	委員会の考察	10
1	なぜ、ロケの時点で問題を感じなかったのか	10
2	なぜ、編集の過程で問題が指摘されなかったのか	11
	(1) 編集作業が細分され分業が進み、 意見交換し違和感を共有する場がない	11
	(2) 複数の目によるチェック体制が崩壊していた	12
3	なぜ、多くのスタッフが問題を感じなかったのか	12
V	委員会の判断	13
VI	おわりに～10年目の「痛恨」	14

I はじめに

「男性か女性かどっちかという質問のやり方、これは許し難い人権感覚の欠如ですね。個人のセクシュアリティにそういう形で踏み込むべきじゃないです。こんなものよく平気で放送できるね。どういう感覚ですか。これ報道番組として…。ちゃんと考えろよ」

午後6時45分を回り、読売テレビの夕方のニュース・情報番組『かんさい情報ネット ten.』も終了に近かった。お笑いコンビが大阪の街をぶらぶら歩く企画「迷ってナンボ！」のVTRから画面がスタジオに戻った直後、男性コメンテーターの厳しい叱責が響き渡った。

問題のシーンは、お笑いコンビが街で出会った人に、何度も性別を詮索する質問をし、健康保険証の性別欄を見せてもらい、さらに「おっばいありますか？」と胸を触って、「男だ」と結論をくだす約6分間。この時、報道フロアで怒声を聞いた報道部長は、急いでVTRを再生しながら、性別を聞き出そうと次々と繰り返される質問に啞然とし、放送後に一報を受けた報道局長は、一見して、なぜこうもあからさまにプライバシーを詮索しているのかと絶望的な気持ちになったという。しかし、番組は、CMを挟んで天気予報、赤ちゃん紹介VTRといつもどおり約10分間、この叱責に誰も反応することなく淡々と進行し終了した。

視聴者からの反響は大きかった。5月10日（金）の放送直後から、多数の苦情と抗議が寄せられ、週末にかけてインターネット上でも「炎上」した。

これに対する放送局の反応も素早かった。翌日には、放送局として全面的に謝罪する方針を決め、翌週には番組ホームページにお詫びを掲載し、2度にわたって番組の中で相当の時間をかけて「人権的配慮に欠けた不適切な放送」をしたことを謝罪した。また、社内に性的少数者の問題に詳しい顧問弁護士を含む「検証・再発防止検討チーム」を立ち上げて問題点を整理し、チェック体制の整備や研修の徹底を決めて早々に実施している。

とはいえ、プライバシーや人権への配慮を著しく欠いた不適切な取材が、なぜなされたのか。また、そのような問題を含んだVTRが、なぜ放送されてしまったのか。さらに、放送中に出演者から厳しい指摘があったにもかかわらず、なぜ番組内でこれを受け止めて対応することができなかったのか。委員会は、その経緯と背景を解明する必要があるとして、第138回委員会（6月14日開催）で審議入りを決定した。

II 審議の対象とした番組

審議の対象となったのは、2019年5月10日に放送された、読売テレビ放送（以下、「読売テレビ」という）の夕方のニュース・情報番組『かんさい情報ネット ten.』（以下、『ten.』という）の金曜日の企画「迷ってナンボ！大阪・夜の十三（じゅうそ）う）」である。

「迷ってナンボ！」は、お笑いコンビが街をぶらぶら歩き、偶然出会った人たちの悩みを聞き出して解決するという、いわゆる「街ブラ」VTRとスタジオトークのコーナーである。この日のVTRは全体で17分57秒、街で出会った3人の悩みを聞いた。その1つが、「犬を連れて散歩の途中、店に立ち寄ってくれる常連さんがいるが、いまだに性別が分からない」という飲食店の女性の「悩み」だった。

お笑いコンビは、店先にいたその人物から、同居家族の有無、名字などを聞き出し、「彼女は？」「いないです」「作らない？」「予定はないですね」というやり取りから、いったん「男性」だと結論を出し、店の女性に報告する。しかし、「乳はホンマに女の出かたやで、ポコンと出てるもん」等と言って店の女性は納得しない。一度店を出たお笑いコンビは、その後偶然その人と再会し、今度は「失礼かもしれないですけど、性別ってどちらなのかなと思ひまして」とストレートに聞き、「ああ。男ですよ」という答えに対して、「男？間違えられません？」などと質問を重ねる。そして、「財布に免許証とか入ってます？」と尋ね、健康保険証の提示を受けて性別欄を確認して撮影したうえ、「おっパイあります？」と聞いて胸を触り、最終的に「男性と確認できた」と店の女性に報告する。

問題とされたのは、この一連の一般の人の性別を執拗に確認するシーンである。

また、これらのやり取りの間には、夕方のニュース番組枠にはそぐわないあけすけな用語が飛び交い、加えてその一部はスーパーによって文字化され強調されている。

さらにこのVTRの後、スタジオのコメンテーターから「人権侵害」を指摘する厳しい声があったが、映像で見る限り、その後、約10分間、番組終了まで制作者、他の出演者からは問題を受け止めるような反応が全くみられなかった。

III 委員会の検証

委員会は、局から提出された問題の放送とその後の謝罪や検証放送のDVDおよび報告書3通を検討するとともに、VTRの制作に関わったチーフディレクター、ディレクター、カメラマンなどの協力会社スタッフをはじめ、報道局長、報道部長、チーフプロデューサー、統括プロデューサーや当日のメインキャスター、解説デスクなど合計13人から約12時間のヒアリングをし、本件放送に至る過程と放送後の対応を

検証した。

1 報道局制作のニュース・情報番組『かんさい情報ネット ten.』

『ten.』は、報道局が制作する月曜から金曜の夕方のニュース・情報番組である。放送開始は、2009年3月30日。関西の夕方のニュースを変えた人気番組である。

放送時間は、午後4時47分から7時までの2時間13分だが、午後5時53分からの全国ネットの『news every.』（22分）を挟んで、「第1部」と「第2部」に分かれている。

それまで、夕方のニュース番組といえば、午後6時からの全国ネットのニュースの後、30分程度、局制作の関西ローカルニュースを伝えるのが定番で、視聴率も低迷していた。そこで読売テレビでは、全国ネットのニュース番組の開始が早まったタイミングをとらえて、生放送の番組枠を拡大し、ローカル発のニュースや話題を幅広く扱い、国際的なネタも生活に密着した独自の視点で切り取るなど、それまでの報道の手法にとらわれない伝え方を工夫してきた。10年たった今では、視聴者も定着し、視聴率も好調で、ゴールデンタイムへの橋渡しとしても、成果をあげているという。

2 『ten.』の制作体制～2つのテイスト・2つの手法

『ten.』の第1部と第2部は、メインキャスターやスタジオゲストこそ同じだが、テイストも制作の手法も異なる。

第1部は、いわゆるニュース・報道番組。VTRは、取材・編集とも、報道の記者とカメラマン、音声・編集担当など局の社員スタッフまたは報道局に常駐する外部スタッフが行う。放送までのチェック体制も徹底している。取材や編集の過程で、複数のプロデューサーやデスクのチェックが入り、ベテランの技術スタッフが意見を述べたり修正を求めたりすることも珍しくない。

第2部は、全国ネットのニュース番組を挟んで、午後6時15分から始まる。ローカルニュースの後、10数分の企画VTRとスタジオトークで構成されるコーナーが中心である。その内容は、曜日ごとに、一味違うニュース解説や「街ブラ」、視聴者投稿をもとにした企画等、バラエティーや情報番組の手法を取り入れ、第1部とは異なる柔らかいテイストが特徴である。そのために、体制も、報道のスタッフ編成ではなく、番組制作局出身の統括プロデューサーの下に各曜日の企画班を置く形とし、コーナーのVTRの取材や編集も、情報バラエティー番組の現場が多い協力会社スタッフの混成チームが担当している。

このように報道局制作の番組に、情報バラエティーの手法を取り入れることについて、当初は報道局内に抵抗があった。しかし、10年間の試行錯誤の結果、第2部の肩の凝らない企画コーナーにはそれぞれに視聴者がつき、現在では、G20や選挙な

どの硬い話題を第2部で取り上げても視聴率が上がるようになり、ニュース・報道を見る新しい視聴者を獲得できたと社内で評価されている。

3 第2部の企画コーナー「迷ってナンボ！」

金曜の企画コーナー「迷ってナンボ！」は、2017年1月から始まった。

舞台とする街だけは決めて、お笑いコンビが、事前の「仕込みなし」「アポなし」で、偶然出会った人々の疑問や迷いを聴いて解決するという「街ブラ」と呼ばれるスタイルの企画である。

これまで、今日の晩御飯の買い物に行くかどうか迷う主婦、祖父への誕生日プレゼントに悩む孫、といったたわいない迷いや、若い仏画師や京大生の人生の悩みを取り上げ、併せて舞台となった街の雰囲気を紹介してきた。一般的に言えば取材でも編集でも特に問題が起こるはずのない肩の凝らない企画で、制作者側にとっても安心感のあるコーナーであった。

なお、このコーナーは、2016年まで、同じコンビが関西各地に出かけ、漁や農作業を手助けして旬の食材を収穫し料理して食べるという内容だった。しかし、準備や収録に手間も費用もかかり、局の解説委員の時事解説や「街ブラ」など他の曜日の企画に比べても制作の負担が大きく、ロケに出るお笑い芸人が体調を崩したこともあった。そこで、このコーナーを「街ブラ」にリニューアルし、さらに「仕込み」がないままに長時間、これというあてもなく街を歩く出演者の疲労とモチベーションの低下を防ぐため、5時間だったロケを3時間を目安に短縮し、「短期決戦」で臨む形となった。

4 「迷ってナンボ！大阪・夜の十三」の企画から放送まで

(1) 企画・ロケ～撮影3時間の短期決戦

大阪・十三の「夜の街ブラ」が企画に挙がったのは、3月上旬だった。提案したのは、協力会社スタッフのAディレクター。「楽しい酔っ払い」が登場すれば、面白く数字（視聴率）も取れるという判断だった。

4月16日、お笑いコンビの2人と撮影チームが現地に集合し、午後7時から10時ごろまでロケが行われた。

撮影チームは、Aディレクターのほか、カメラマン、カメラ助手、音声担当とアシスタントディレクター2人の合計6人で、全員が協力会社のスタッフである。Aディレクターは約10年、カメラマンも独り立ちして7年、いずれも30代でそれぞれバラエティーや情報番組での経験は十分だが、現場をともにするのは初めてという混成部隊であった。

ロケが始まれば、進行は基本的にはお笑いコンビに任される。Aディレクターは、

事前に、商店街、飲み屋街の位置関係を下見し、街の雰囲気を感じてはいたが、特に取材対象を決めることなく、まさに「仕込みなしのぶっつけ本番」である。

撮影チームは商店街を歩き出し、そのうち、犬の鳴き声にひかれて飲食店の店頭に向かった。そこで、問題のやり取りとなる。

お笑いコンビは、飲食店の店主が、店先で犬を連れて人と親しげに話をしているところに近づき、悩みはないかと聞くものの話は広がらず、その場を離れようとする。すると、顔を隠した店の女性が、顔見知りでもある犬を連れて人が「男か女か分からない」という「悩み」を耳打ちする。これを受けて、お笑いコンビがこの人をやや離れたところに誘導し、1人暮らしか？名前は？と質問すると、怪訝そうではあるが特に拒絶されることなくやり取りは続く。ただ、氏名については、名字は「X」だと答えたが、名前については「僕ですか？なんで？下の名前はいいです」と明かさなかった。それでも、お笑いコンビは、彼女はいるのか？結婚する気はあるのか？など根掘り葉掘り質問を繰り返し、その結果、男性と判断し、いったんXさんとは別れた。

お笑いコンビは店に戻り、「分かった！男！」「彼女いません、とか言っていましたから」などと報告した。しかし、店の女性たちは、「ウソかもしれん」「オナベかも」「乳の出方が女やで」「竿もある」などと言って信用せず、すっきりした解決にならないまま、撮影チームは次の「悩み」を探しにその場を離れた。

この時点で、Aディレクターもカメラマンも、このエピソードは使えない、編集でカットになるだろうと感じていた。店の女性の「悩み」は解決せず、周りが男か女かをこっそり詮索しているだけというまとまりのない、感じの良くない話になったからである。

その後、別の飲食店の取材を終えた撮影チームは偶然、Xさんに再会した。Aディレクターは、中途半端に終わった最初のやり取りを挽回し、エピソードを番組で使えるようにするチャンスだと見て、「今度は単刀直入に」とお笑いコンビに指示を出した。その際、言葉だけで店の女性たちを納得させられなかったと感じていたので、「免許証のようなもの」を確認するというアイデアを口にしたかもしれないと言う。

そこで、お笑いコンビは、再度、Xさんに声をかけ、「失礼かもしれないですけど、性別ってどちらなのかなと思って」「えっ、純粋男？」などと性別をストレートに質問し、さらに、「財布に免許証とか入ってます？」「僕らだけ見ていい？ほんま男かって」などと持ちかけて、承諾を得て健康保険証を見せてもらい、「ほんまや。『男』となっております」というやり取りに発展した。また、店の女性の「胸が出ている」という発言を受けてか「おっぱいありますか？」とも聞いて、Xさんが「触ってみます？」と応じたのをよいことに実際に触って「ちょっとだけ柔らかい」「中学生の…肥満児みたい」などと感想を述べる場面もあった。

その後、お笑いコンビは、Xさんと一緒に、店で顛末を報告し、これに店の人たち

も納得して、ハイタッチで応じた。

撮影チームは、後半のやり取りによって「悩み」が解決し、企画の中でエピソードとして使えるようになったと判断し、また、店の人たちとXさんとの関係も良い雰囲気、「ノリの良いロケだった」という満足感があった。

なお、当日のロケは、波乱万丈の人生を語る愉快的な男性が登場するなど、午後10時までには十分な材料を獲得し、その後、風景や料理などの撮影をして終了した。

(2) 編集～分業とチェック体制

ロケ後、VTRの仮編集は、もっぱら現場を取材したAディレクターの個人作業となる。その間、チーフディレクターが演出上の、B統括プロデューサーがコンプライアンスも含めた全般的チェックをそれぞれ2回行い、修正をしてテロップ等を加える本編集と録音を経てVTRは完成したが、今回の性別チェックの問題は見過ごされた。

ロケ後の4月23日、24日にAディレクターが仕上げた仮編集VTRは、25日にチーフディレクターに持ち込まれ、チェックを受けた。チーフディレクターは、問題のやり取りの部分は、長い、下品、踏み込んでいる、という感想を持ったが、コンプライアンスに関わるチェックはプロデューサーの仕事という理解をしていたこともあり、性別等の質問には特に問題を感じなかった。

翌26日、B統括プロデューサーは、Aディレクターと一緒に局内で修正した仮編集VTRを1時間にわたってチェックした。B統括プロデューサーは、Xさんが下の名前を答えることを拒否していること、表情が笑っていないことに加え、親しい関係だということに、店の女性が直接Xさん本人に性別を聞けずに、顔は隠して番組で確認を依頼するという状況に引っかけた。そこで、本人の承諾は大丈夫か、放送しても店と本人の関係は大丈夫なのかと何度もAディレクターに確認した。しかし、Aディレクターから、Xさんも店の人も喜んでいて、放送を楽しみにしている、と説明され、違和感を残しつつ了承した。

29日には、局外のスタジオで、Aディレクターは編集オペレーターと助手とポストプロ編集を行った。「オナベ」「竿」等の夕方のニュース・情報番組にはそぐわない文字スーパーもあったが、特に不適切だと指摘されることもなかった。

5月3日、B統括プロデューサーは、文字スーパーなどが入った修正後の仮編集データを受け取り、2度目のチェックをした。改めて見ても、常連客だというXさんと店の間でどうしてもこういう質問をする展開になるのかと違和感が残り、本人の承諾の意思に変わりはないかとAディレクターに再度確認した。しかし、性別や性的指向を確認すること自体の問題には意識が及ばなかったと言う。なお、この時、B統括プロデューサーは、胸を触るシーンにあった「中学生の…肥満児みたい」という感想の部分を、見ている子どもたちが気にしたり、からかいの理由になったりするといけな

と考え、カットするよう指示している。

7日には、局で、Aディレクターと報道局に常駐する外部スタッフのCミキサー、『ten.』のナレーターである読売テレビのDアナウンサーが集まり、約30分かけてナレーション録音をした。Cミキサーは、質問がしつこい、飼い主のXさんが下の名前を言わない、表情が笑っていないという点が気になった。また、Dアナウンサーは原稿を一瞥した段階で、SNSでも、『ten.』の第1部でも、性的少数者の話題はしばしば取り上げられており、性別、性的指向や性自認はデリケートな問題だと思われるのに、「男か女か」を直截に質問していることに引っかかりを感じた。しかしナレーション読みに気を取られ、また、信頼するB統括プロデューサーのチェックを通っているという安心感があり、特に指摘することはなかった。

その後、それぞれのスタッフにデータが回され、音響効果、最終ミキシングを経て放送日の朝、VTRが完成し報道局に納品された。

なお、第2部金曜のコーナーVTRは、もともと番組全体の責任者であるチーフプロデューサー2人のいずれかと第2部担当のB統括プロデューサーがダブルチェックする体制となっていた。しかし、チーフプロデューサーの1人が辞め、残ったもう1人のEチーフプロデューサーは、労働基準法改正にともないスタッフ約50人の労働時間の管理もすることになり、昨年秋ごろから、VTRチェックに割く時間がほとんどなくなっていた。その結果、ダブルチェックと言いながら、実態は、B統括プロデューサーが1人で2回見る、という形になっていた。

(3) 放送～凍りついたスタジオと司令塔の不在

当日の『ten.』第2部。ローカルニュースに続き、午後6時26分から、金曜日の企画コーナー「迷ってナンボ！大阪・夜の十三」のVTRが始まった。

スタジオの出演者は、局アナウンサーの女性メインキャスター、サブキャスター、解説デスク、コメンテーターとして後に叱責をした男性作家のほか女性弁護士と男性タレントがおり、スタッフ側には、責任者としてB統括プロデューサーとVTRを制作したコーナー担当Aディレクター、進行を仕切るフロアディレクター、撮影、録音など技術スタッフがいた。

メインキャスターも局の解説デスクも、生放送で初めて問題のVTRを見た。ちなみに第2部のVTRは、スタジオ出演者の新鮮なリアクションを含めて楽しむという趣旨で、通常、メインキャスターもデスクも事前に目を通すことはない。

Xさんの性別を確かめるシーンが始まると、メインキャスターも解説デスクも、質問がしつこく、踏み込んだ内容だが本人の同意は取れているのかと疑問を持った。しかし、性別確認などが性的少数者やLGBTの問題となる点は、明確な認識がなかったという。

このやり取りが進むにつれて、『ten.』に長く出演しているコメンテーターの男性作家が「ひどいね」とつぶやいて、明らかに不快な様子を示し、これを見て、メインキャスターやデスク、スタジオサブ（副調整室）にいたスタッフ、フロアディレクターは不安を感じた。

そして、VTR終了を受けてサブキャスターが、コメンテーターに振ろうとしたタイミングで、「男性か女性かどっちかという質問のやり方、これは許し難い人権感覚の欠如ですね」「こんなものよく平気で放送できるね。ちゃんと考えろよ」という男性コメンテーターの厳しい叱責が飛んだ。

その語調と「人権感覚の欠如」という言葉の激しさにスタジオは凍りついた。

メインキャスターがとりなそうとするが、適切な対応はできないままCMに入った。この間、メインキャスターも解説デスクも、理由は明確に認識できなかったものの、お詫びをしなければならない大きな問題が生じたとは思ったが、とっさに判断がつかなかった。放送局側の出演者として、局を代表して謝るのか、誰に対して、何を謝るのか、局が作って放送したVTRについて、コメンテーターと同じ立場で批判できるのか、謝るのもかえって無責任ではないかと、考えるほど判断は難しくなり、結局、指示があるまで心の準備をして待つという姿勢になった。

この事態にまず対処すべきだったのは、立ち会っていたB統括プロデューサーであろう。しかし、自らOKを出したVTRに重大な問題があり、うすうす感じていた違和感の正体を生放送で指摘された異常事態に、頭が真っ白になって動けなかった。

また、Eチーフプロデューサーは、本来ならスタジオサブで放送に立ち会い、問題をフォローすべき立場にあった。しかし、以前から第2部に関しては報道フロアの自席で別作業をしながら見るのが当たり前になっており、その役割を果たすことができなかった。VTRでのお笑いコンビの質問がちょっと踏み込んでいるなあと感じたものの、コメンテーターの叱責の厳しさは想定をはるかに超えており、これに驚き、とっさに席を立ってスタジオに飛び込み、CM中にコメンテーターに謝罪した。しかし、メインキャスターやデスクに対応する余裕はなく、すぐに善後策を相談するため報道部長席に向かった。B統括プロデューサーも、Eチーフプロデューサーがスタジオを出て行く姿を見て、我に返ってあとを追った。その結果、CM明けのスタジオは、サブにもフロアにも混乱を収拾する司令塔のいないまま、放り出された格好となった。そして、CM明け後の番組は、誰も叱責に触れることはなく、天気予報、毎回の定番になっている短いVTRと、予定どおりに淡々と進行した。

一方、放送を見ていなかった報道部長は、急いでVTRを確認し、あれこれと性別を執拗に聞き出そうとするやり取りに愕然とし、これは絶対に番組中で何とかしなければと思った。集まったEチーフプロデューサー、B統括プロデューサーと「謝罪」を検討するが、3人とも動揺のあまり思考停止に陥り、文案がなかなか決まらない。

それでも、まずは「不快な思いをさせた」「不適切な表現があった」という明白な2点で番組終了までにお詫びすることにした。報道部長がEチーフプロデューサーとB統括プロデューサーに指示し、2人は急いでスタジオに向かった。しかし、スタジオ入口のドアに着いた時には、番組はすでにエンディングに入り、あと10数秒しか時間が残っていなかった。その結果、番組内での謝罪の機会を逃してしまった。

5 放送後の迅速な対応と検証・再発防止策の徹底

番組終了の午後7時ごろから、読売テレビの視聴者センターには苦情や抗議が殺到し、一時は電話がかかりづらいほどになった。ネット上でも批判が多数書き込まれ「炎上」した。

本番終了直後に、Eチーフプロデューサー、B統括プロデューサーらは、コメンテーターに謝罪するとともに、Xさん、飲食店、出演者のお笑いコンビなど関係者に連絡して事情を説明し直接お詫びをした。Xさんも飲食店の関係者も、放送に苦情を言うことはなかったが、飲食店には週末に抗議や嫌がらせの電話が数十本あったとのことである。

その後の対応は、真摯で素早かった。問題点を明確にして謝罪をし、自主的な検証と再発防止に局全体で取り組む姿勢を明らかにした一連の対応は、自主・自律の理念に基づく適切なものだった。

読売テレビは、番組終了直後から報道局長、コンプライアンス担当部門を中心に対応を検討し、週末ではあったが翌土曜日には、全面的なお詫びの方針を決めて、メディアからの取材に対して非を認めるコメントを出した。

週明けの13日には、会社のホームページに「【緊急】『かんさい情報ネットten.』で人権上著しく不適切な取材・放送」というお詫びを掲載した。同日の『ten.』第1部の冒頭では、メインキャスター、解説デスクがそれぞれ生放送の現場で問題点を理解し適切な対応ができなかったことについて、自身の率直な気持ちを交えて反省の弁を述べ、さらに報道局長がお詫びをした。また、15日には、『ten.』の放送枠を午後3時48分から1時間拡大して「検証」を行い、メインキャスター、叱責したコメンテーターと解説委員が20分以上にわたって不適切なVTRが放送された経緯を説明し、再発防止に努めると約束した。さらに17日には、「迷ってナンボ！」のコーナーを当面休止すると告知した。

これらの番組での対応に加え、社内に、コンプライアンス推進室、報道局、編成局、性的少数者の人権問題に精通した顧問弁護士などをメンバーに「検証・再発防止検討チーム」を作り、広く関係者のヒアリングを行うなどしてVTRが放送に至った経緯や背景について自主的な検証を行った。①LGBT問題への意識の欠如②本人承諾が

あればよいという認識③チェック体制の不備④報道番組としての意識の欠如——を問題点として指摘する検証の結果は、6月7日に公表され、『ten.』第1部の冒頭でメインキャスターと解説委員が説明した。また、番組制作体制上の対応として、番組チーフプロデューサーを2人に増員し、企画コーナーの管理職によるダブルチェックを徹底するとともに、第三者的に番組内容をチェックする管理職を配置するなど、制作体制を抜本的に見直した。さらに、今回の直接の問題であったセクシュアリティに関する感度を高めるべく全社的な研修会を開催しただけでなく、他の人権問題に関する意識を高めるためにこれまで年2回開催してきた全社コンプライアンス研修会の場でも人権をテーマにし、さまざまな人権問題を取り上げる人権研修にも力を入れていくこととした。

また、6月7日には、番組審議会で報告して審議に付するとともに、8日には、視聴者の意見や批判にこたえる番組『声 あなたと読売テレビ』でも、報道部長が出演して、判明した問題点や再発防止策を説明した。

IV 委員会の考察

1 なぜ、ロケの時点で問題を感じなかったのか

読売テレビの自己検証では、撮影チームが執拗に性別の確認をするに至った大きな原因として、撮影チームの個々人が、LGBTについての知識や問題意識を持ち合わせていなかったことを挙げている。しかし、問題となったやり取りにおいて真っ先に疑問にすべきは、「男女の性別」というプライバシーに関わる事柄に、安易に、しつこく踏み込んでいる点ではないか。ごく普通の世間の常識のレベルでも、初対面の相手にプライバシーに関わる事柄はむやみに尋ねることはしない。しかも、性的少数者の種々の困難が議論されるようになった時代である。ロケにおいて、性別、性的指向、性自認の問題の繊細さに配慮せず、これを執拗に聞き出そうとするだけでなく、公的な証明書を求め、さらに身体的特徴を確認しようとしたことは、時代の課題へのアンテナの感度が著しく欠如しており、人権を尊重すべき放送局としては、深刻な問題と言わざるをえない。

そのうえで、撮影チームの個々人が、なぜプライバシーに対する感性やLGBTについての知識や問題意識を持ち合わせていなかったのかという点が問題となる。

自己検証においては、「本人がいいと言っている」「本人が質問に応じて、それを放送することを承諾している」から大丈夫という認識が背後にあったという指摘がなされている。仮にそのような事情があったとしても、プライバシーやLGBTに関する問題意識を持ち合わせていれば、本人の承諾の有無にかかわらず、許される取材であると考えることはなかっただろう。

また、「夜の十三」を舞台に選んだ時点で、昼間の商店街の日常とは異なった、ルーズさや逸脱の面白さが期待されたこともあるだろう。お笑いコンビが性別を聞く際に「失礼かもしれないですけど」と述べている点からも、昼間の他の街ではなかなかしにくい質問をしていることはうすうす感じ、それが今回は期待されているという雰囲気、ロケのチームにあったのかもしれない。しかし、プライバシーやLGBTに対する深い思慮があれば、その雰囲気に流されることは決してなかったはずである。

さらに、「街ブラ」企画が内包する危うさも背景にあった。

「街ブラ」は、一般的には事前準備に手間も時間もかけずに、当日現場で収録できた材料を編集して番組にする点で費用も抑えられ「コストパフォーマンスが良い」と言われる。しかし、「アポなし」「仕込みなし」のぶっつけ本番、出たところ勝負のロケには、事前にリスクを検討する機会もない。

今回も「アポなし」「仕込みなし」の3時間のロケの間に、企画としてまとまるだけの内容を収録する必要があるのに、Xさんとの1回目のやり取りでは、「男か？女か？」という店の女性の「迷い」は解決せず、この時点では、番組では使えない可能性が高かった。そのために、たまたま2度目にXさんに出会った際の質問がより執拗になり、言葉だけではなく「公的な証明書」を確認し、「ボディタッチ」で身体的特徴をも確認しようとするなど歯止めがきかなくなった面がある。現場スタッフにとって、エピソードが完結せずVTRがまとまらない、現場の言葉を借りれば「成立しない」リスクは重い。ぶっつけ本番で掴みかけた材料を形にしようとするあまり、プライバシーや人権への配慮に意識が向きにくくなりかねないという点で、「街ブラ」というスタイル自体が内包する危うさが露わになったように見えた。

そういう危うさを内包する「街ブラ」企画では、事前取材、準備や演出に代わる、ロケ現場での撮影チームの感度の良さが不可欠であり、これを確保する体制も整える必要がある。たとえば、今回の撮影チームは、協力スタッフの混成チームであり、現場でアラームを発し意見交換をするには前提となる信頼関係が構築されていなかったことも、このような結果となった遠因かもしれない。

2 なぜ、編集の過程で問題が指摘されなかったのか

(1) 編集作業が細分され分業が進み、意見交換し違和感を共有する場がない

性別、性的指向、性自認の問題の繊細さに配慮せず、これを執拗に聞き出し、さらに公的な証明を求め、身体的特徴を確認しようとする、そのやり取りをロケで取材したにとどまらず、編集作業を経てもなお問題の指摘がないまま放送するに至ったことは、さらに深刻な問題である。

第2部のVTRの編集は、Aディレクターの個人作業が中心で、編集チェック、ナレーションの録音、音効、ミキシングのそれぞれのプロセスで、データをやり取りし、

それぞれが必要な作業を行う分業スタイルである。このような取材後の編集作業の流れは、制作の効率化につながり、情報バラエティー番組を中心に放送の現場でも当たり前になっている。ただ、このようなやり方は、個々のスタッフが、番組内容全体に興味を持ち、批評する意識が持ちにくいだけでなく、仮に違和感があっても、それをスタッフ間で共有し、検討する場や時間がないことにも留意が必要である。

『ten.』では、従来のニュース・報道のスタイルを踏襲する第1部では、VTRの取材は記者と局に常駐する技術スタッフが行い、編集作業も記者と（放送局に常駐している）編集や録音スタッフが関与し、作業中にスタッフ間で意見を交わす。今回のやり取りについても、ナレーション録音の場で局のアナウンサーも録音スタッフも小さな違和感を持っていた。仮に、この場が第1部と同様に、違和感を言葉にして意見交換する場と意識づけられていれば、問題点に気づき共有できた可能性はあった。同じ場に複数の目と耳があり、相互の違和感を共有できるスタイルは、今では難しくなりつつある。しかし、孤立し分断された作業スタイルではない場をどこかで持つことは、「街ブラ」のような準備の段階での検討ができない企画には特に必要だろう。

もっとも、作業のスタイルの如何にかかわらず、編集部門の誰か一人でも、LGBTについての知識や問題意識を持ち合わせており、また深い思慮があれば、小さな違和感を全体に共有できた可能性があったはずである。

（2）複数の目によるチェック体制が崩壊していた

『ten.』第2部の木曜・金曜の企画コーナーについては、チーフプロデューサー2人のいずれかとB統括プロデューサーがダブルチェックする仕組みが作られていた。ところが、昨年秋ごろからなし崩し的にB統括プロデューサーのみが2回見る、という体制になってしまった。言うまでもなく、2人のプロデューサーがそれぞれの目で見ると、同じ人が2回見るダブルチェックではその意味は大きく異なる。複数の目によるチェック体制の崩壊は、今回の放送を許した1つの要素と思われる。

また、第2部のB統括プロデューサーは、時事ネタを扱う別の番組取材では、コンプライアンスの観点から問題点を注意深く慎重に判断して、しばしばトラブルを防いでいた。他の管理職は、このようなB統括プロデューサーの判断に厚い信頼を寄せており、そのことがかえって、「任せておけば大丈夫」という油断を生み、ダブルチェック体制の崩壊を過小評価して放置することにつながったことも否めない。

3 なぜ、多くのスタッフが問題を感じなかったのか

今回制作にあたったスタッフが、本件放送が「許し難い人権感覚の欠如」した内容でありながら、「よく平気で放送できるね。どういう感覚ですか。これ報道番組として…。ちゃんと考えろよ」との厳しい指摘を受けるまで、初対面の人に根掘り葉掘り、

特に微妙なプライバシーを詮索する質問をすることに疑問がわかなかったのはなぜか。また、世の中には性的少数者であることを隠し、苦しんで生きている人がおり、今回のような執拗な詮索が、視聴者の中にもいるであろうその人たちを傷つけるかもしれないと想像できなかつたのはなぜか。スタッフの多くは、性的少数者であるとカミングアウトして活躍している出演者との交流もあり、その存在を違和感なく受け入れていることは見てとれた。しかし、スタッフや関係者に対してヒアリングで上記の問いを重ねても、残念ながらその理由は明らかにならなかった。今回ヒアリングをした長く報道にたずさわってきた関係者の1人は、根本的に人にやさしい、人を思いやる気持ち、対象をリスペクトする気持ちがあれば、ああいう取材はしないだろう、振り返ってそこに自分がテレビ局の人間であることの特権意識はなかったかと自らに問うことが必要だと述べている。問題の根本原因は、知識の有無よりも深いところにあるのかもしれない。

人権が問題になるのは性的少数者に限らず、国籍や人種、病気や障がい、学歴や出身、経済的困窮など様々な面で少数者の立場にある人がいて、差別や偏見に苦しむ現実がある。そのような人たちの声は小さく、耳を澄ませなければ聞き取れないことも多い。これからは社会問題や人権にもっと関心を持つようにしたいという意欲は多くのスタッフや関係者から聞かれ、読売テレビも研修を繰り返し関心の幅を広げようとしている。きっかけは何であれ、自分の興味のある分野だけではなく広く社会への関心を高め、想像力を磨き、取材する対象へのやさしさを持ったアンテナの感度の高い現場が作り出されることを期待したい。

V 委員会の判断

本件放送は、特に性的少数者の人権や当事者の社会的困難への配慮が課題として議論されている時代に、もっとも感性が鋭敏であるべき放送が、著しく配慮を欠くやり取りを放送した点で看過できない問題がある。

委員会は、本件放送には、日本民間放送連盟（民放連）の放送基準「(3) 個人情報の取り扱いには十分注意し、プライバシーを侵すような取り扱いはしない」に反し、「適正な言葉と映像を用いると同時に、品位ある表現を心掛ける」よう求める放送倫理基本綱領および「人権の尊重」と「報道における表現は、節度と品位をもって行われなければならない」と求める民放連の報道指針に反する放送倫理違反があったと判断した。

VI おわりに～10年目の「痛恨」

本件放送には明確な放送倫理違反があったものの、放送の中でコメンテーターから直ちに的確かつ厳しい指摘がなされたことに加え、放送後の読売テレビの対応は、自主・自律の理念に基づく放送局の対処の在り方として高く評価したい。

委員会による13人の関係者へのヒアリングでも、一人ひとりがこの問題に向き合い、気づき、傷つき、後悔していること、家族の反応や不安までを、正直に口にした。そして、これを機に、「プライバシー」「人権」「少数者、弱者」へのより深い意識を養い、配慮を持って、より良い番組を作ろうとする強い決意を、それぞれから感じる事ができた。

その一方で、報道番組に組み込まれた、肩の凝らない情報・バラエティー風の企画への「油断」、現場の「疲れ」、取材での細かい配慮より「ノリ」の良さや企画としての「成立」に価値を見出す雰囲気、費用の削減につながる「コスパ」が優先されがちな現実も見えた。

また、本件放送の検証を通して明らかになった上記のような問題は、近年「報道ニュース番組」と「情報バラエティー番組」との境界が、どんどん曖昧でボーダレスになっていることの「危うさ」でもある。

「報道番組」であるうちは、プライバシーの尊重、人権意識や事実を確かめる裏取りといったことについて神経をとがらせていたチェック体制が、「情報バラエティー番組的」になったからといって、軽んじられていいはずはない。逆に、政治や社会問題を扱うようになった「情報バラエティー番組」においても、「報道番組」同様の、深い問題意識やチェック体制は必要であろう。むしろ、曖昧でボーダレスになったからこそ、それぞれの知見や認識を共有し、これまで以上に視聴者のプライバシーや人権に配慮した番組作りを、放送局、放送界全体で希求しなければならない。

とはいえ、どんなに備えているつもりでも、失敗することはある。問題が起こってしまった時、それにどう真摯に向き合い、迅速かつ適切に対応するか、その失敗を、それぞれの心にどう刻みつけるかが、最も大切なことではないだろうか。

ベテランの番組関係者は、今回の失敗を「痛恨」という言葉で結んだ。開始当初は、試行錯誤を繰り返し、視聴率も低迷していた番組が、10年たってやっと、「ここぞ」という時に見てもらえるように育ってきた、と言う。台風の時でも知事選の時でもみんなが見てくれる、柔らかいことも放送しているが、やる時はやるねと思ってもらえる、そういう信頼をようやく勝ち得てきた。しかし、この問題が起こったことで、その信頼が、また何年も後退したかもしれない。「痛恨」という言葉を噛みしめるように繰り返した。

10年かけて築いた信頼を、一瞬で失うこともある。しかし同時に「痛恨」からし

か、深く心に刻まれないこともある。その「喪失」と「痛恨」から、放送へのより深い信頼は生まれるのか？ 彼らのこれからは期待したい。

